



藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

362

進んでいない復興

〜三たび大槌を訪ねる①〜

東日本大震災が発生して早や二年半が過ぎた。にもかかわらず復興は遅々として進んでいないというのが正直な印象である。

被災地・岩手県大槌町を訪れたのは今回で三回目。一番変わったと思ったのは、ガレキが撤去されたさら地に

月見草などの野草が花をつけていることだ。震災の生々しい傷跡を被い、一見、広大なさら地に見える。しかし、近づいて見ると地面は破壊されたコンクリートやブロック、低く折り曲げられた鉄骨があちこちにある。月見草の花が何も

なかったかのように美しく咲いているので余計に震災の悲しみが伝わってくる。常駐スタッフの話によると、これらの上約二割の盛り土工事をし、そのあとに建物を建設するという。それまでは建築許可は出さねないらしい。大槌町は海岸に近い大槌駅前から町役場周辺には住居が集中していた。駅前の四階建ての



三階の窓から津波の高さを表示したものを指差す私

ビジネスホテル「寿」は流失を免れ、そこを改修して我々ボランティアの活動拠点になっている。

二〇一一年三月十一日午後二時四十六分、地震が起こり、それから三十分あとの三十分ごろ、最大で二十二



旧町役場前「花」が手向けられている

はそのまま残っている。訪れたのがお盆の直後だつたこともあり、パイプと波板で作られた空間に花がたくさん手向けられていた。

震災当時の総務課長で、生き残った現町長はこの建物をそのまま残したいという強い希望があったようだが、住民の間には災害時の避難場所は、我々の宿舎の目の前にある小高い丘の城山公園になっていたのに、町長たちが役場の中で対策会議を開いていたことに反発がある。建物の維持管理も自分たちの税金が使われる。結局、前面の壁だけを残すことになりそうだと常駐ス

二〇一一年三月十一日午後二時四十六分、地震が起こり、それから三十分あとの三十分ごろ、最大で二十二

二〇一一年三月十一日午後二時四十六分、地震が起こり、それから三十分あとの三十分ごろ、最大で二十二



墓地は墓石の墓場になっていた

タッフは教えてくれた。町役場以上に震災の痛々しさを伝えるのは宿舎である旧ビジネスホテル前の小高い城山公園の斜面にある墓地だ。まだ墓石が壊れたままのものが多い。遠くから見ると復元されているかのように見えるが、墓石の一部が欠けたり、ひび割れたりしてまるで墓石の墓地のようだ。それでも、お盆にはその墓石に向かって祈りを捧げたことがある。

一番心を痛めたのはそこで一人の被災者にも出会わなかったことだ。仮設住宅は安全だといえ、不便な離れた高いところにあるからだ。涙のため息しか出てこなかった。